

私が通った幼稚園・保育園(2)

保育観の源泉—私の場合

—幼稚園時代の経験から—

金田 利子

私の通った幼稚園—記憶をたどって—

象の滑り台（鼻がすべるところになっている）、それは、今でも公園などでよく見かけるがプラスチック製が多い。私の通った園のそれはまさに象色の石でできていた。どのくらいそこで遊んだかは定

かでないが、幼稚園といえば園庭にでんと存在していたその遊具が、印象に残っている。卒園して二〇年経ってから訪ねたときにはまだ「生き」ていた。

大阪府北河内郡寝屋川町香里（現在寝屋川市）の丘の上にあった、聖母女学院附属幼稚園、これが私の二年半（三年保育の途中から）通った幼稚園であ

る。時は、一九四二年九月から四五年三月まで、『幼児の教育』も一時休刊されていたという、まさに戦時下のさ中であつた。

はじめに覚えていた風景をいくつか上げる。カトリック系の園であり、私の担任の先生の場合、黒のベールをいつもかぶっていた先生（青ぐみⅡ五歳児担当・深堀先生という方）と、式などのときだけそれをかぶる先生（黄ぐみⅡ四歳児担当・お名前は忘却）と、普通の服の先生（赤ぐみⅡ三歳児担当・同）がおられたこと、入園・進級の日に桜の咲く園庭で写真を撮つたこと、運動会はなく、お遊戯会・おひな祭りと遠足があつたこと、一・二キロメートルほどの道のりをお弁当と防空頭巾を腰に下げて、時に空襲警報があると「退避」しながらも、友達と子ども二人だけで通つており、道草をくいながら帰つてきたことなどである。

行事の遠足では、広々とした緑一色の庭園のよう

なところでごろごろがたりできたとときに無性に嬉しかったことを覚えている。

お遊戯会・おひな祭りでは、赤い絨毯の段を作つて子ども自身がお内裏様やお雛様、三人官女や五人囃子になつてみたりすることが取り組まれており、私は、「きょうはわたしのひな祭り」という、ひな祭りを楽しむ子どもになつて段の脇に立つ役になつたこと、当時役はすべて先生が決めていたので、内心お内裏様やお雛様になつている子を少しうらやましく思う気持ちもあつたが、「ひな祭りを祝う子ども」の役もそう悪くはないと思いつつ、緊張しながらも一種の充実感のようなものは味わつていたように記憶している。

そうしたなかで、私はどんな子どもだったのかについて触れておこう。

室内から外に出るときなど、先に出た先生を追つて多くの子どもが「せんせい、せんせい」と保育者

の腕に鈴なりのようにぶらさがることがよくあったが、私はそれができずに一人で、遠くから昇降口の辺で、その様子を見ているような子どもであった。くつついている子を「批判的」に見ているというよりは、行きたい気持ちもあるのだがどうしてもできないというのが本当のところだった。それならば、幼稚園に行きたがらずにぐずったりしたことがあったのかというと、現在九十二歳の母に聞いてみたのだが、そういうことはなく、結構喜んで通っていたという。

幼稚園時代のつらい心的体験

私は、いわゆる不器用であり、折り紙とか細かな製作とかが苦手のほうであった。あるとき、茶色の折り紙で、糊とはさみを使って、馬を作るという課題が出た。三歳か、四歳か、五歳のどのクラスの時点であったかは忘れている。しかし、鮮明に記憶し

ていることと、かなり難しい課題であったことを考え合わせると三歳でなかったことは確かのようなのだ。私は、園で泣いたことは一度もない子であったが、馬が思うように作れず、そのときは室内で泣いてしまった。どうしてそうなったのかは分からないが、その際に泣いたまままで出窓のような所へ上げられてしまった。帰る時間になって先生が馬を作って渡してくれた。

少しも嬉しくはなかった。私が態度で「意見表明権」を行使したならば、「作ってなんか欲しいんじゃないんです。なんで馬を作るのか、そのわけが聞きたいし、作る必要があるのなら作り方をもっとゆつくり分かるように教えて欲しかったんです」と言いたかったし、気性が激しく行動に出る子なら、あるいは先生に楯突くことなどあり得ない時代でなかったら、作って渡された馬を先生の目前でピリッと破いてしまったに違いないような心境だった。し

かし、私は、時代性を差し引いても、物心ついてからは自分の欠点として直さなければという課題になってきたのだが、幼くしてすでに、エセ「教養者」になってしまっていて、そんなことはとても言えずまた行動できず、一見素直にその先生作の作品を家を持って帰った。

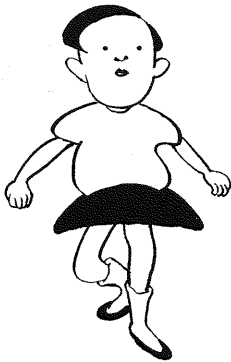
それから、もう一つの心理的苦痛が重なった。私の気持ちからは、母の胸に飛び込んで泣き、嫌だったその日の思いを訴えたかったはずなのに、それもできずにいるうちに、母はその作品を私が作ったものと勘違いして「じょうずね」と賞めてくれたのだ。出来事を理路整然と言うことはできず、先に述べた性格もあって、母の胸で泣くこともできず、私は、自分で作ったものではないものを貰ってしまった屈辱と、それをいかにも私の作ったものと思われたことをそのままに受け流してしまった自分へのふがいなさという、二つの納得のいかない、偽りの体

験のつらさが大人になっても、そしてさらに年を重ねても消え去らない「つらさ」として残っている。

自分自身の体験から

幼児教育について思うこと

私は、こうした自分自身の体験のマイナスをプラスにしようとしてきたように思う。つまり保育のあり方を考えるとき、上のような経験が基になって、幼児期においては、みんなの中で感情を出すことができ、出して収める体験をたくさん積み重ね、みんなの中で自分らしく過ごせることを重視する考え方



が自分の保育論の基盤になってきたように思う。

私の得た幼児教育以後六〇年の歳月が経っている。今なら、先生が役割を決めたり、子どもの納得なしに、子どもの中に前後のつながりが見えていないのに勝手に課題を出すという保育は少なくなってきたであろう。また、心の状況を出せないよりは、泣いても暴れても、「せんせい、それは違います」ということを表せることをまず重視し、徐々に言葉で表現できる方向を育てていくという保育に発展してきているであろう。そして、子ども同士が相談し合つて役を決めたり、思いを分かち合つたり、作り方などの技術を伝え合つたりできるような、子どもも集団を育てる保育が展開されるようになってきている。

「気になる子」の問題が取り上げられてからすでに一〇年近くが経とうとしている。多くはクラスの動きからはずれがちな子どもが対象になる。しかし、

幼い頃から体は小さくても大きさは大人と変わらな
い複雑な感情を爆発させることのできない「教養
者」になってしまっていて、一見よく適応してし
まっている子どもの中に、私がそうであったよう
に、本当の思いを出せずに胸の中にしまい込んでし
まう子どもがいることにも気を向ける必要がある。
もちろん今では子どもと保育者の関係や子どもと子
どもの関係についても、集団の中で一人ひとりが自
分らしく過ごせる仲間づくりの実践も進められてき
ており、大きく期待できるところである。

大人が決めて子どもが行う保育から子ども主体の
保育へと戦後大きく変換し、理論の上では、一人ひ
とりの子どもの発想が子ども同士をつなぎ、保育者
の支えでどんどん展開し、一日が細切れにされるこ
となく子どもたちの思いでつながっていく、要求が
ぶつかりあつたときには、それを大事に捉えて伝え
あいを展開し、遊びの中に知的好奇心をはぐくみ、

学びを共有し協働していくという子どもとともに保育が展開されるようになってきた。

しかし、保育の営まれている大人達の世界は、太平洋戦争のさ中とは次元は異なっているが、地域には危険が満ち、競争が激化され、世界は各地で戦争状態にあり、子どもが育ちやすい状況ではなくなってきた。保育条件も必ずしも良くなつてはいない。それゆえに、今日理論的には右記のように、子ども主体の保育に発展してきているが、状況の変化の中で子どもたちは、新たなつらさ日々出会っている。

そうしたなかで、六〇年前の体験をふまえての提言をまとめれば次のようになろう。

子どもとは、時代を超えて「言葉で上手に表現できない複雑な思いの塊」であること、その子どもと意思を分かち合うにはすぐに大人が解釈して行動に出るのではなく、子ども同士で考え合うことも含

めて、様々な方法で「間」を取ること、絶えずそれで良かったか省察してみること、そしてもしそれができないときにはそれは何故かについて分析し、保育の質の向上を社会の状況・保育環境や人的・物的・組織的条件と関わらせて捉え、必要なときにはその改善のために外に向かって働きかけていくことではないかと思う。

一九四五年の終戦を機に私は茨城県の開拓でランブ生活を始めるようになったのであるが、戦時下においても幼児の暮らしを守ってくれた象の滑り台の幼稚園での三年間は良くも悪くも私の人格の基礎を作っていたことは紛れもない事実であり、今回この小論を書く機会を頂き、その重要さを再認識するとともに、戦争さ中から終結直前までの園生活の生きた保育史の証人として自分自身があることを改めて自覚できたことに感謝している。

(白梅学園大学)